# 葦毛通信
（いもう）

サギソウ

平成 29 年 8 月 23 日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町 3 丁目 1
TEL：0532-56-6060
No. 54

## 1、2017モニタリング報告－3

葦毛湿原ではサギソウが満開になり、シラタマホシクサが蕾をつけています。例年ならミミカキグサ類が咲き誇る頃ですが、今年は開花数が非常に少ない状態です。葉はある程度見られるので、花期が遅れているだけで、今後開花数が増えるのかもしれません。他の夏の花も同じような状況です。ノカンゾウも多い時で一日に 20 輪くらい咲いていましたが、今年は５輪程度です。モウセンゴケの花も、例年、白い絨毯のように一面に広がっていたところが、まばらに咲いていました。トウカイコモウセンゴケも開花が少ない状態です。

夏の花の開花が少ないのは、冬から雨が少なく、例年水が地表面を流れているところが乾燥して水分が足りないのが大きく影響していると思われます。愛知県内でも、低気圧や台風が通過した尾張地方では大雨が続きましたが、当地方はあまり降っていません。

昨年はオス、メスともに確認できたハッチョウトンボが、今年はまだ確認できていません。順調に回復すると思っていましたが、渇水の影響は大きかったようです。かつての葦毛湿原には多くのハッチョウトンボが生息していましたが、15 年ほど前に 3 年続いた渇水の後に絶滅状態になり、少しずつ回復していたところでした。

これまで、ヒメヒカゲについては大規模植生回復作業を行う中で、専門家の指導のもと、棲息環境の復元・保全を行ってきました。葦毛湿原では、ハッチョウトンボはヒメヒカゲよりも生息数が少なく危機的な状況です。今後は、ハッチョウトンボについても棲息環境の復元・保全に取り組みたいと思います。

ハッチョウトンボ♂（2016 年 7 月 14 日）

### １）V地点（三の沢）

昨年の作業直後の三の沢は、下流から上流を見て左側が地表面に土壌シードバンクの黒い土が目立ち、右側はチャートの礫が目立つ裸地になりました（葦毛通信 No.46）。４月には地表面にあった黒い土は雨に叩かれてチャートの礫の間に落ち込んで、全体が白く見える裸地になりました（右写真）。現在は徐々に植物が復活していますが、予想通り、左側に多くの植物が発芽し、右側はわずかです。

V地点抜根作業後（2017 年 4 月 5 日）

右写真上はＶ地点を下流側から見たところです。右写真中はＶ地点の中流部の左側を中心に見たところですが、土壌シードバンクである黒い土があったところに多くの植物が出現しています。この部分は細かな礫（砂）でしまっており、保水性が高いところです。右側や手前の下流側は大きな礫が目立ち、やや乾燥して保水性が悪いところです。この部分は、谷が埋まり、大きな礫が堆積している部分なので、土壌シードバンクが形成されにくく、上から降り注いだ植物の種子や土は礫の間を抜けて深い所に落ち込んで堆積していると考えられます。

つまり、谷に堆積した大きな礫を除去すれば、谷が埋まる前の地表面が現れ、そこには谷が埋まる前に堆積した土壌シードバンクや谷が埋まった以後に落ち込んできた種子を豊富に含んだ良好な土壌シードバンクが残っている可能性が高いと判断できます。そして、その埋土種子から湿地を復元することも十分に可能です。葦毛湿原以外の湿地においても同様な方法で湿地復元を行うことは十分に可能です。

**２）Ｖ－２地点（実験区）**

Ｖ－２地点（右写真下の中央部）には、葦毛通信No.34 で報告した６×３ｍの実験区（Ｖ－２地点）があります。葦毛通信 No.46 では木の伐採と除草を行っ

**Ｖ地点現状（2017 年 8 月 17 日）**

**Ｖ地点中流部（2017 年 8 月 17 日）**

**Ｖ地点上流部・Ｖ－２地点（2017 年 8 月 17 日）**

た１年目の抜根作業前と抜根作業後の状況を示しています。
　今回は抜根後約８カ月が経ったところです。抜根作業前（葦毛通信 No.46）と比較すると大きな違いは無いように見えますが、中央から手前左側にかけてはシラタマホシクサが小さな群落を作り、また、単独で発芽したものが多く見られるようになりました。作業前は昨年の10月１日の状況でしたので、今年の 10 月 1 日にはシラタマホシクサの開花がはっきりと確認できるようになると思います。

**３）Ｓ・Ｇ地点（一の沢）**

　一の沢は昨年木の伐採と除草を行ったところで、今年は１年目になります。葦毛通信 No.50 では伐採後の春の状況を報告しました。
　夏になり、伐り株からはヒコバエが伸び、様々な植物が発芽してきました（右写真）。一の沢上流部は国有林に接しており、指定地内は日陰になっています。ここでは、ミズギボウシやショウジョウバカマが多く発芽しました。また、水の流れの周辺には、イやカヤツリグサの仲間が小さな群落を作っています。
　中流部では、水量の多い水の流れの中心部で植物の発芽が少なく、コシダの根の層が残っているところも周囲よりやや高くなっており乾燥気味で植物の発芽があまり見られません。
　下流は湿地として残っていた部分で、ヌマガヤやネザサが繁茂し、サワギキョウが多く発芽しています。

**一の沢上流から下流へ（2017 年月日）**

**一の沢中流から下流へ（2017 年月日）**

**４）Ｓ地点のオオバノトンボソウ**

一の沢でオオバノトンボソウが 10 株以上発芽したことを葦毛通信 No.51 で報告しました。明るくなることによって発芽してきたと考えていましたが、そうではなく、森の中で生育していたものが木を伐ることにより目立つようになったようです。他の草の間や実験区で掘り上げた根の層の下から発芽したものは順調に生育しました。

オオバノトンボソウは半日陰状態を好むようで、木を伐って明るくなることにより、葉が焼けて枯れてしまったものも見られました。

**Ｓ地点のオオバノトンボソウ（2017 年 6 月 24 日、7 月 9 日）**

**半日陰のオオバノトンボソウ（2017 年 7 月 13 日、7 月 9 日、7 月 9 日）**
**Ｐ地点の林床　　他の植物の陰（Ｓ地点）　掘り上げた根の層の下（Ｓ地点）**

Ｓ地点のオオバノトンボソウは、木を伐ることにより衰退してしまったようです。しかし、葦毛湿原全体では、オオバノトンボソウは数を増やしており、Ｐ地点の林床部やＮ地点のネザサの中で開花している個体がいくつも見られます。一の沢のオオバノトンボソウは一時的に衰退しますが、抜根終了後２～３年して植物が復活してくれば、他の植物の陰に隠れながら復活してくると予想しています。